

〔「用器画法」嘱託〕が建築の概念、原理の概要を講義し、最後に伊東について一言述べている。伊東の講義はまず、「建築及び其流派」と題し、建築の字義から始まってルネッサンス建築に至るまでの建築様式の変遷を説き、次いで「美術建築及び建築装飾原論」と題し、建築美学、建築装飾術の要件、建築装飾法、建築装飾史について述べている。テキストは専ら西欧の建築装飾関係の書であった。

伊東のうちに工学博士、帝国芸術院会員、帝国学士院会員、東京帝国大学名誉教授ともなる我が国の建築学術界の偉才であり、特に東洋建築史学の基礎を作った功績は大きい。が、本校嘱託となった頃はまだ東大大学院で日本造家学を専攻する学生にすぎなかった。彼は東大建築史教授で岡倉校長と親交のあった小島憲之の推挙により本校に赴任したが、以来、岡倉校長と相識ることにより、日本建築史研究へと将来の展望を切り開くに至ったといわれる。伊東の講義筆記で現存するのは上記のノートのみであるが、実際の講義はあるいは日本、東洋建築にも及んだかも知れない。

伊東の辞任後、塚本靖が講義を引き継いだ。塚本ものちに東大教授、工学博士となり、また文展や博覧会をはじめとする美術行政にも大きく貢献する人であるが、本校に赴任した当時は東大造家学科を卒業したばかりで、塚本巳之吉といった。本校には明治三十二年まで在職している。その講義筆記と確定しうるノートは現存していないが、前述の原安民が筆記したノート類の中に、それと思われるノート（担当者および年度の記入なし）がある。内容は建築術の定義、起原および発達、様式の種類、様式史（エジプト、ゴシック建築、インド、支那、日本建築）に互り、日本建築については「工匠技術之懐」

と「宮雛形」を参考書として紹介している。

黒川真頼、長尾雨山の「和漢文」講義

この科目は開校当初は普通科第一、二年（週二時）、専修科第一（週二時）に課せられたが、明治二十三年の規則改正後は普通科における授業時数が週三時と増えた代わりに専修科の履習科目から削除され、同二十五年の規則改正後は予備の課程で週二時、各科第一年で週二時課すことになった。和文は黒川真頼が『徒然草』を、漢文は長尾雨山が『古文真宝』を中心に教えた。明治二十七年の規則改正後はこの科目は削除され、代わって小杉榎郎担当の「書字」（予備の課程、週一時）のみとなった。講義に関する資料としては小島光真の「明治二十二年二月 備忘録」に黒川、長尾の講義の筆記がある。小杉の講義については未詳。

今泉雄作の「図案法」講義

「図案法」は明治二十五年の規則改正以後、各科第一年（週一時）に課せられた科目で、この規則改正では「図案実習」（彫刻科第一年、週六時）、「彫金図案」（彫金科第三年、週七時）、「鑄金図案」（鑄金科第三年、同上）なども置かれ、図案関係の科目が増えた。それらは実習を主体とするものであったが、「図案法」は学科に属する科目で、今泉雄作が担当した。

今泉の講義は原安民の「今泉教授口述、図按法筆受」（明治二十五

年九月（同二十六年七月、鑄金科第一年のときの筆記）によって、元禄、享保のころ、職工の間に秘伝として伝わっていた図案法（差渡しの規矩、高さの規矩、真の模様規矩、行草模様規矩、模様大小の規矩、大極集合法、建物および器物の真行草、三具足の法等々）を解説し、併せてものを作るときの心構えを説くものであったことがわかる。

「理科及び数学」講義

「理科及び数学」という科目は岡倉自筆カリキュラム原案（66頁参照）には無く、本校規則制定の段階で加えられた。当初は第一、二年を通じて週四時課すことになっており（「理科二時、数学二時」と考えられる）、割合い時間数が多かったが、明治二十五年の規則改正後は予備の課程（一年間）で「理科」のみを週二時課すことになり、同二十九年に至ってこれも廃止された。ただし、入試科目中の「算術」ないし「数学」は削除されなかった。授業担当者は千本福隆（数学）、磯野徳三郎（理化学）、上原六四郎（理科、数学）、吉田彦六郎（理科）、足立震太郎（同）らであった（担当期間については巻末の職員任免表参照）。

初期の「理科」授業については断片的な資料が残っている。その一つは前出小島光真の「明治二十二年二月備忘録」で、^{〔職型〕}糖、暑中美味飲料、菊海苔、色料（青、緑、藍、黄、赤黄）、インキ、顔料用金泥の製法が記されている。もう一つは前出菅紀一郎の「美術学校講義筆記雑草稿」で、こちらには講義項目を書き出したと思われる部分と各項目の解説を筆記した部分（断片）が含まれている。その項

目は次のとおりである。

眼ニ慣レタル変化、物理的及ヒ化学的变化ノ関係、摘要、化学的化合ト通常ノ混化、混合物及ヒ化合物ノ差異、化合物及ヒ元素、元素及化合物ノ例、化学的作用、化学的作用ノ原因、化学的作用ノ緊要、空気ハ化学的作用ヲ起ス、空气中ノ燃焼、燃焼ノ規則、酸素ノ製法、酸素ノ物理的性質、酸素ノ化学的作用、動物体ニ於ケル酸素ノ作用、空气中ノ燃焼、元素ハ互ニ一定ノ重量ヲ以テ化合ス、窒素ノ存在、窒素ノ性質、水ノ存在、動物体ノ水、結晶水、風化スル物体及潮解、水素ノ物理的性質、物体ノ含水量水素ヲ基本トス、天然水、飲料水、水ノ性質、窒素ヲ含有スル、物理学化学、他種ノ変化、塩素ノ存在、塩素ト酸素・水素ノ化合物、純粹硝酸水素、アンモニヤノ製法

右項目の解説の筆記の中には小島光真のノートの場合と同様に、群青、藍、クロム黄、食塩、緑青、朱、洋紅、岱赫、黄土、唐土、胡粉、雲母等、顔料の製法が記されており、美術と関係のある講義が行われたことがわかる。

これらの資料から、講義の担当者が磯野、上原のどちらであったかを判定することはできない。上原の講義については小島光真と同期の板谷波山が回顧談（146頁参照）の中で、

「教へて居る本が振つて居る、洋行の時明治四年に買った〔上原が当時洋行した形跡はない。——編者註〕ロスコーの化学の原書